

主 題：結婚Q&A

聖書箇所：コリント人への手紙第一 7章1-16節

Iコリント7：1をご覧ください。「さて、あなたがたの手紙に書いてあったことについてですが、」、少なくとも、この1節を見たときに、パウロはコリント教会から手紙を受け取っていたことを私たちに教えてください。もうすでに、そのことは私たちは学びました。パウロがこのコリント人への手紙第一を記した理由は、コリント教会の問題、また、彼らの質問に答えるためでした。ですから、この7章からその後を見ていくと、様々な質問に対するパウロ自身の答えが記されています。

- 1) 結婚について 7：1、25
- 2) 偶像にささげた肉について 8：1
- 3) 霊的賜物について 12：1
- 4) 死人のよみがえりについて 15：1
- 5) エルサレム教会への献金について 16：1

ですから、こうしてみことばを見ると、コリント人への手紙第一はコリント教会へパウロが送った手紙でコリント教会の人々の質問にパウロが答えている、それが記されているのです。今日、私たちが見ようとしている7章は「結婚についての質問」です。それに対してパウロが答えていきます。ただ、皆さんの頭にしっかりと覚えておいていただきたいことは、これはあくまで教会の質問に対するパウロの答えであって、結婚に関する聖書の教えのすべてがここに記されているわけではないということです。そのことを踏まえた上でみことばを見ていきましょう。

☆結婚についてのパウロの答え

1. 独身者は既婚者に優るのか？ 1-2節

これが最初の質問でした。7：1を見てください。「さて、あなたがたの手紙に書いてあったことについてですが、男が女に触れないのは良いことです。」、「男が女に触れ」とは「性行為」のことです。コリント教会では「私はこのような性交渉をしないために独身でいる」とか「結婚していても性交渉を行うべきではない」という考えを持った人たちがいたのです。まさに、これが彼らのスローガンでもあったのです。なぜ、このような考えが彼らの間に存在するようになったのか？前回も私たちは見ましたが、グノーシス主義の影響があったのです。そうするとこの考え方では二極の生き方を生み出します。一つは、前回も見たように、快楽主義です。肉が価値のないもの、悪いものなら、肉の好きなようにすればいいのではないかというものです。また、ある人たちはそれとは違って禁欲主義に走ります。肉の欲望から徹底して離れようとします。そして、この質問をした人たちは少なくとも禁欲主義こそが神の前に喜ばれると信じていたので、このような質問をしたのです。ですから、彼らの質問は「独身者は結婚した人に比べて優っているのかどうか？」です。

それに対してパウロは答えます。「男が女に触れないのは良いことです。」と、彼らの考えを否定してはいません。確かに、みことばに反する性行為は罪です。前回も見たように、性行為は結婚した夫婦にだけ与えられた神からの祝福です。今の世の中のように、結婚していない男女がフリーセックスなどということは神の前に罪です。また、既婚者が他の女性に走るという不倫のようなものもすべて罪です。ですから、パウロは確かに、そのような罪に走らないこと、「男が女に触れない」ことは良いことだと言うのですが、だからと言って、彼らの考えを100%肯定しているわけではありません。

なぜなら、2節に「しかし、不品行を避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。」と、ここには結婚の勧めが記されているからです。パウロが教えることは、たとえどんなに

あなたの意志が強くても禁欲主義には限界があるということです。しかも、このコリントの町は見て来たように、様々な性的誘惑に溢れている町でした。ですから、その不品行を避けるために、罪からあなた自身を守るためにそのような欲をコントロールできないのなら結婚しなさいと言うのです。私たちは誘惑に負けてしまう弱い者です。だから、罪を犯さないために結婚すればいいのだと、パウロは彼らに勧めるのです。そして、結婚したからといって、彼らを独身者と比べて劣っているのではないというのがパウロの答えです。聖書は結婚を禁じていません。却って、結婚を定められたのは神ご自身です。思い出してください。あの神の創造の中で神はすべての動物を造られ、そして、そのそれぞれにアダムが名前を付けていくのですが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。動物はアダムの助け手にはならなかった。そこで神はアダムのあばら骨のひとつを取ってそれをもって女に造り上げ、その女をアダムのところに連れて来たと書かれています。創世記2：20-24「：20 人はすべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた。しかし人には、ふさわしい助け手が見つからなかった。：21 神である【主】は深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。：22 神である【主】は、人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。：23 人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」、そして、「：24 それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」と、結婚のことが教えられています。つまり、その両親を離れて二人が一つとなって生活を始めるということです。ですから、神ご自身が結婚を定められたゆえに、結婚がおかしいということは有り得ないことです。パウロが言いたかったことは、既婚者であろうと独身者であろうと、神の前には同じだということです。

2. 既婚者は性行為を止めるべきか？ 3-5節

二つ目の質問は3-5節に書かれています。「既婚者は性行為を止めるべきか？」という質問です。3節を見てください。「：3 夫は自分の妻に対して義務を果たし、同様に妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。：4 妻は自分のからだに関する権利を持ってはおらず、それは夫のものであります。同様に夫も自分のからだについての権利を持ってはおらず、それは妻のものであります。：5 互いの権利を奪い取ってははいけません。…」、「義務」ということばが記されています。いろいろな意味がありますが、これは「負債、借金」という意味があります。「果たしなさい」という動詞は「それを支払う」という意味です。つまり、「どうしてもしなければならないこと」です。何か負債を負ったなら当然支払いをしなければなりません。つまり、パウロはこういふことばを使って、夫婦間における性行為は伴侶に対する当然なすべき義務だと言うのです。パウロは「夫婦は互いに相手を自分よりも優先し、相手を喜ばせることを考えるのであって、伴侶の求めを断る権利がないこと」を教えるのです。

夫婦間の性行為は神が与えた特権です。創世記1：28に「神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」とある通りです。神はこのように人間を造られこのように命じておられるのです。結婚だけでなく性行為も神がお造りになった美しいものです。夫婦に与えられた喜びであり、そして、義務であるとパウロは教えるのです。それを教えた上でパウロは例外があることを教えています。

5節の続きに「…ただし、祈りに専心するために、合意の上でしばらく離れていて、また再びいっしょになるというのならかまいません。」と、例外とは「祈りに専心するため」と書かれています。たとえば、私たちは日々の生活でいろいろなことを経験します。大変な苦しみ、悲しみもあります。そのときは本当に「祈りに専心したい」と、そういうことがあります。また、一人で神の前に時間を取らなければならないこともあるでしょう。そのような時のことです。そのときに、何か許可されているのか？「しばらく離れていて、」と言います。これは別居のことではありません。性的関係をしばらく止めるということ、それが可能だということです。見ると「祈りに専心するために、合意の上でしばらく離れていて、」とあり、あくまで夫婦が話し合って二人が合意した上で、しばらくの間、性的関係をもつことなく、祈りなり、神との個人的な時間に割くことができる。でも、それはずっとではなく、終われば元の状態に戻ります。

そのような状態に戻らなければ、「あなたがたが自制力を欠くとき、サタンの誘惑にかからないためです。」と、サタンの誘惑にかかってしまう可能性があると言うのです。自制心を欠いてしまうときに、性的な欲

望に対して自分の伴侶がそれに応えようとしなければ、罪を犯してしまう可能性があるのです。そのことをパウロはここで教えたのです。

これを聞いたコリントの人たちには驚きだったでしょう。なぜなら、人間は自分の欲望を満たすために相手を使おうとするからです。でも、聖書が教えることは「夫婦においては伴侶の幸せのために、相手の満足のために尽くしなさい」です。これはあなたがたの義務である、あなたがたが支払わなければならないものだ、こうして夫婦間の性に関することを教えるのです。これがパウロが与えた答えです。

6節には「以上、私の言うところは、容認であって、命令ではありません。」とあります。なぜ、こんなことを言ったのか？これは今見た3-5節の教えに限定しているのではなく、1節から記して来た教え、特に、2節で「しかし、不品行を避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。」と教えたことに触れて、これは「容認」しただけであって、「結婚しなさい」と命じたのではないということを行っているのです。パウロは「すべての人は結婚するべきだ」と教えていません。この後、見ていきますが、パウロは7節にあるように「私の願うところは、すべての人が私のものであることです。」と、パウロは「すべての人が私のように結婚しないで、自由に時間を使って主に仕えることが出来る。それがすばらしいと思う」と言いますが、その後、「しかし、」ということばで続いています。「しかし、ひとりひとり神から与えられたそれぞれの賜物を持っているので、人それぞれに行き方があります。」と、つまり、パウロは「独身は既婚者に優っていない」ということを確信していたので、それぞれに賜物が与えられているからそれに従って生きればよいと言うのです。

というのは、独身の賜物というのがあるのです。それをいただいているならそのように生きればよいのです。マタイ19:12に「というのは、母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい。」とある通りです。ですから、生まれながらに神が独身者と定められた人もいるし、結婚を良しとされている人もいるということです。

では、「結婚を良しとされている」ということは神があなたにふさわしい伴侶を備えておられるということです。これらの一連の教えで私たちがしっかり覚えなければいけないことは、サタンが支配しているこの世の中は私たちに様々な「うそ」をつきます。サタンが「うそをつく」というのは当然のことです。それがサタンの特徴の一つですから。どんなうそか？「～をすればあなたは幸せになる」「～をすればあなたは満足する」と言って、そのすべてのことは神のみこころに反することを教えるのです。つまり、真の神を信じなくても神に従わなくても、あなたは幸せを得ることができるし本当の満足を得ることが出来ると。大切なことは、たとえば、結婚に関して言えば、結婚が幸せの条件であるかのようなうそに騙されてはいけないということです。

そんなメッセージが私たちの周りには溢れています。こういうものを手に入れさえすればとか、こういうものをあなたが達成すれば幸せになると…。本当の幸せは神だけが与えてくださるのです。神からのギフトです。主のみこころに従う者に神が与えてくださるのです。悲しいことに、多くのクリスチャンがそのような「うそ」に惑わされてしまう…。本当の祝福、本当の幸せは、あなたを造ってくださり、あなたを愛していのちを捨てられた神ご自身が与えてくださるのです。神だけが与えてくださる。神を信じ神のみこころに従って行くことです。

ですから、この二つ目の質問「既婚者は性行為を止めなければならないのか？」、それに対してパウロがこのように教えを与えるのです。

3. 独身の男とやもめは再婚すべきか？ 8-9節

三つ目の質問が8、9節に出ています。「:8次に、結婚していない男とやもめの女に言いますが、私のようにしてられるなら、それがよいのです。」、

・「結婚していない男」：非常に珍しいことばが使われています。新約聖書にはわずかに4回しか出て来ませんが、4回ともこのIコリント7章に記されています。今見ている8節に、11節、32、34節にそれが出しています。8節は「結婚していない」、11節は「結婚せずに」、32、34節は「独身」ということばに訳されています。では、この「結婚していない男」とはどんな人なのか？文字通りには「結婚していない、独身である」と取れますが、どういう意味で使おうとしていたのか？34節をご覧ください

い。「…独身の女や処女は、…」と書かれています。ということは、「独身の女」と「処女」の二つに完全に分けています。「処女」は一度も結婚をしたことのない人です。性的関係を一度も持ったことのない人です。

「独身の女」はそうではないということです。恐らく、この人は結婚していたのでしょう。現在は離婚をして独身状態にあるのです。ただ見てみると9節に「:9 しかし、もし自制することができなければ、結婚しなさい。情の燃えるよりは、結婚するほうがよいからです。」と書かれています。つまり、再婚のことを言うのです。そうすると、この人たちは離婚をしてもその離婚は神の前に正しい離婚であったと言えます。神が再婚を認めているからこの離婚は正しい離婚でした。再婚が認められない離婚もあるからです。結婚していない男、或いは女はどういう人なのか？J・マッカーサー先生は「恐らくこの人は離婚後に救われた人ではないか」と言われます。確かに、そのようなケースがあります。離婚した後に救いに与る…。そうすると、その救いによってすべての罪が赦されるのです。だから、再婚が可能なのです。

「やもめ」は言うまでもありません。伴侶と死別した人です。男女に関わらず…。

・「私のようにしていただけるなら」 : これは「変わらないで～のままにいる」ということです。パウロがこの二人、結婚していない人と伴侶と死別した人に対してこのように言うのです。このことばからもパウロも元は既婚者であったことが分かります。なぜそう言えるのか？皆さんもご存じのようにパウロは正統派のユダヤ教徒でした。正統派のユダヤ教徒では結婚を規定していました。適齢期は18歳でした。また、パウロは「サンヘドリン」と呼ばれるユダヤ人の政治、司法の最高議会の一員でした。だから、彼はステパノを殺すことに賛成していました。そのような司法の最高議会のメンバーだったのです。そのメンバーになるための規則があって、それは既婚者であることでした。ですから、パウロはある期間結婚していたのでしょう。でも、今は独身なのです。どうして独身になったのか？その理由は記されていません。妻と死別したのかもしれないし、また、彼がイエス・キリストを信じてユダヤ教を捨てたときに、彼女が彼から離れて行ったのかもしれない。記されていないので分かりませんが、かつて彼も結婚していて今は一人だということなのです。

そこで、この8節に「結婚していない男と」と言って、かつては結婚していたけれど別れてしまった、そういう人に対して「私のようにしていただけるなら、それがよいのです。」と言います。離婚した後、私が神の前を歩んでいるように、いろいろな誘惑に勝利しながら生きていくように、それができるなら「それが良い」、でも、「もし自制することができなければ、」、そういった欲に打ち勝つことができなければ、「結婚しなさい。情の燃えるよりは、結婚するほうがよいからです。」と言います。こうしてパウロは恐らく、離婚した後救いに与った、そして、今は独身である人に対して、そして、伴侶と死別した人に対して、自制できればそのままでも良いけれど自制できなければ再婚すれば良いと、そのように教えるのです。

4. 既婚者は離婚すべきか？ 10-11節

これが四つ目の質問です。「:10 次に、すでに結婚した人々に命じます。命じるのは、私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。」、ここに「命じるのは、私ではなく主です。」と書かれています。これはパウロではなく主ご自身がこのテーマについてすでに教えておられたからです。パウロは実際に主がその教えをされていたことを知っていたので、敢えて、このように書いているのです。12節を見ると「次に、そのほかの人々に言いますが、これを言うのは主ではなく、私です。」と書かれています。10節は「主の命令」、12節は「これは私が言うことです」と変わっています。12節からのテーマについてはイエスが直接語られたことかどうかはパウロも知らないからです。でも、パウロはこれが神の前に正しいことだと教えるのです。そして、それが正しかったのはこのメッセージが神のおことばに記されているからです。ですから、「既婚者は離婚すべきか？」という質問については主ご自身が教えておられると言ってその教えを与えるのです。

「すでに結婚した人々に命じます。」とあります。12節から見ると、12節には「信者の男子に信者でない妻があり、」、13節には「また、信者でない夫を持つ女は、」とあります。この後も見ると、この夫婦は一方が信者であってももう一方が信者でないのです。信者と不信者の夫婦です。そうすると、10、11節に見る「すでに結婚した人々に」というのはどちらも信者であると、パウロはそのことを覚えて話しているのでしょう。そして、このクリスチャンである夫婦に対してパウロが言うことは「妻は夫と別れては

いけません。」です。クリスチャン同志なら離婚してはいけないというのが命令です。そのことを命じるのですが、11節には「——もし別れたのだったら、」と続きます。パウロはもうすぐでクリスチャンたちの中に離婚している者たちがいたことを知っていました。パウロはこの「別れたのだったら、」という動詞を不定過去形を使っています。不定過去形とは、この出来事が過去に起こった事実であることを述べているのです。どのようにパウロがそのことを知ったのかは分かりません。1年半滞在していた時に見ていたのかもしれませんが。パウロはもうそのことが事実起こったことと確信しているのです。

そこで、クリスチャンのカップルですでに離婚してしまっている場合、二つの選択肢があると言います。見ていただくと11節「結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい——また夫は妻を離別してはいけません。」と、再婚の選択肢はないのです。再婚は神の命令に反することです。では、もし、再婚すればどうなるのか？それについては確かに聖書が教えています。イエスはこのように教えます。マルコ10:11、12「:11 そこで、イエスは彼らに言われた。「だれでも、妻を離別して別の女を妻にするなら、前の妻に対して姦淫を犯すのです。:12 妻も、夫を離別して別の男にとつぐなら、姦淫を犯しているのです。」、つまり、クリスチャン同志が離婚をした後だれかと再婚するなら、あなたは姦淫の罪を犯していますと言うのです。なぜなら、その離婚は神の前に認められないからです。男女を問わず、クリスチャン同志の離婚には再婚という選択肢はないのです。

5. 夫婦が信者でなければ離婚すべきか 12-16節

このことを教えた後、12-16節は「夫婦が信者でなければ離婚すべきか」という質問です。先にも見たように、夫婦が信者である場合は分かった、では、片方が信者でない場合は？と、そういうケースがたくさんあったはずですが。既婚者のどちらかが信仰に至った、私たちの周りにもいっぱいあります。そのケースはどうすればいいのか？12節「次に、そのほかの人々に言いますが、」と、今見たのは信者同志の既婚者です。「これを言うのは主ではなく、私です。」と、先ほど見ました。主ご自身がこれについての教えをしておられないので、パウロがこれは神が教えることだと言って、この後そのことを記しているのです。

・「いっしょにいることを承知している場合」と繰り返されている

12節「信者の男子に信者でない妻があり、その妻がいっしょにいることを承知している場合は、」と「いっしょに住むことを同意している場合は」ということです。このことばはあるギリシャ語の辞典では「喜ぶ」という意味をもったことばです。ですから、確かにそのような関係なら、喜んでその状態に留まり続けている、そのように選択しているなら「離婚してはいけません。」と言います。

クリスチャンの夫がいて、まだ救いに与っていない妻がいる。この夫は結婚してから信仰を持ったとしましょう。そうすると、この夫婦の間にはいろんな問題が出て来ます。これまで夫婦で偶像崇拜していたのが片方はしなくなります。これまでは自分たちの好きなことをやっていたのが、片方がイエスを信じることによって、今度は神が喜ばれることを為していこうとします。そうすると、夫婦間にいろいろな溝が生じて来ます。それでも、救いに与っていない妻が留まるというならクリスチャンの夫は彼女を離婚してはいけないのです。これが12節で教えていることです。

もちろん、ここで覚えておかなければいけないことは、片方がイエス・キリストの救いに与った、そのときに必要なことは、救われていない伴侶に対してさばくことを止めることです。よく、こういうことを耳にします。「私は天国に行くけれどあなたは地獄に行く」と。それは何の助けにもなりません。信仰者であるなら、キリストの愛を示し続けることです。尊敬をもって仕えていくことです。

また、13節にも「また、信者でない夫を持つ女は、夫がいっしょにいることを承知している場合は、離婚してはいけません。」と同じことを言っています。男性だけでなく女性に対しても同じことを言います。その理由が書かれています。

・なぜなら、信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです（14節）

大変なことをパウロはここで教えるのです。夫婦がいて片方が救いに与った、そうすると、救われていない方の伴侶もその祝福に与っていると言うのです。その後、子どもに関する教えが続きます。14節「そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。」と。まず、こ

で「聖められている」「聖い」ということばは救いのことを言っているのではないということです。だれか一人が信じたなら後の家族は信じなくても救われる？そうではありません。「救い」とはひとり一人が神の前に課せられた責任です。

では、この14節は何のことを教えているのか？夫婦の一人が救いに与ったなら、その夫婦において神は豊かな祝福を彼らに与えてくださるということです。なぜなら、信仰者に与えられる祝福がその人を通して溢れ出るからです。思い出しませんか？前回も見たように、ヨセフが売られて行ったとき、ポティファルがイシュマエル人からヨセフを買いました。ヨセフはこの家庭で仕えるのですが、ポティファルの家族はどうだったのか？聖書はこのように記しています。創世記39：5「主人が彼に、その家と全財産とを管理させた時から、【主】はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を、祝福された。それで【主】の祝福が、家や野にある、全財産の上にあった。」と。ということは、ヨセフがいることによってその家族全体が祝福されたということです。パウロが教えていることは、信仰者であるあなたはあなたの家庭において、家族において祝福をもたらしているということです。ちょっと考えてしまいますね。

こういうことです。あなたは神の恵みによって救いに与った。そうすると、あなたのうちに伴侶のために、子どもが与えられているならその子どもたちのために祈り始めます。そして、その愛する者たちに神のすばらしい祝福のメッセージを伝えます。二人とも神を知らなければそういうことは有り得ません。彼らは好きなように生活します。この人生は生きているうちが花であって死んでしまえば何もないから今を楽しめばいいと。そういう観点によって子どもたちも育っていくのです。

でも、一人がイエス・キリストを信じるときに、本当の祝福は何なのか？どうすればそれを得ることができるのか？死んでしまった後はどうなるのか？今まで分からなかったすべての真理を知ることになるのです。ですから、それに基づいて家族を導いていこうとするのです。私たちも多くのときに経験することは、祈られていることの喜びであり祝福です。だれかが祈ってくれていることはどれ程大きな励ましか…。その家庭において、祈ってくれる人が与えられるのです。

ですから、パウロは言います。「信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。」と。祝福をいただいていると。子どもたちも神を知らない世界で生きて好き勝手に歩いていく、そういう人生を歩いていく可能性がある中であって、救いに与った親が真理を教えていきます。「あなたは神によって造られた」ことを教えるのです。「あなたは神に愛されている」ことを教えるのです。「神はあなたにすばらしい計画をもっている」ことを教えるのです。「どうすれば祝福に与るのか」を教えるのです。そして、その子のために祈っています。パウロはそのことを言うのです。

パウロたちがピリピの町を訪問して伝道したときに彼らは投獄されました。そのときにその牢の中で主を称えていました。地震が起こって看守たちは囚人がみな逃げたと思って自害しようとしてしまいました。そのときにパウロは「「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」（使徒の働き16：28）」と言います。そのときに看守がパウロの許に来てこう聞きます。「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」（16：30）」と。パウロとシラスは「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（16：31）」と言いました。あなたが信じたなら家族全員が救われるという約束を与えたものではありません。でも、あなたが信じることによって、これまでキリストのすばらしい救いを知らなかった家族の面々が、この救いのメッセージを聞くことになるからです。しかも、救われたあなたを通して神ご自身が生きておられる真の神であると知るのです。だから、救われたあなたはご自分の家族にご自分の伴侶にすばらしい祝福をもたらしたのです。そのことをパウロは言います。続きを見てください。

・しかし、もし信者でないほうの者が離れて行くのであれば、離れて行かせなさい。（15節）

あなたはその夫婦生活において、伴侶を愛して伴侶に仕えて伴侶の幸せのために最善を尽くしていこうとする。それでも、その救われていない方の伴侶があなたから離れて行くのであれば、離れて行かせなさいと言います。この「離れて行く」とは「離婚」のことです。つまり、その人のする選択に反論をしてその人と争うことがないよということ。なぜなら、15節の最後に「神は、平和を得させようとしてあなたがたを召されたのです。」とあるからです。争いをすることではなく平和を保つこと、それがあな

たに与えられていることだと言うのです。ですから、もし、あなたが愛を示してもベストを尽くしても、救われていない方が離れて行くならそうさせて上げなさいと言います。

その後こう続きます。「そのような場合には、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。」と。「縛られることはありません。」、つまり、そうして救われていない方があなたから離れてあなたと離婚した場合、離婚された方は再婚ができるということです。なぜ、縛られることがないのか？なぜ、再婚が認められるのか？それはこの離婚が神の前に認められる離婚だからです。

・神の前に離婚が認められる場合 :

1) 伴侶の不貞 = 伴侶が不貞を犯したときには離婚することができます。マタイ 19 : 9 「まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すので

す。」、「不貞のためでなくて」と、これが例外です。不貞以外の理由で離別するならそれは姦淫を犯すことになる。でも、伴侶が不貞を犯して最終的に離婚になってしまった場合、その離婚を神は認められるということです。

2) 不信の伴侶によって離婚された場合 = 今見て来たことです。救われていない伴侶が救われているあなたを離婚した場合です。

もちろん、私たちは「神は離婚を憎んでおられる」と知っています。そして、どんなに辛いことがあっても救われている方は一生懸命その関係を守り続けようとし、離婚しないようにと頑張ります。その人の心の中にある願いは「今はこういう状態でもいつかはこの伴侶が救いに与る」というものです。その願いをもって結婚生活を続けようとし、でも、パウロはこのように言っています。16節「なぜなら、妻よ。あなたが夫を救えるかどうか、どうしてわかりますか。また、夫よ。あなたが妻を救えるかどうか、どうしてわかりますか。」と。あなたがその状態に留まることによって伴侶が救われるなら、確かにそういう願いはありますが、でも、あなたがそこに留まるからといってその人が確実に救われるという保証がどこにあるかと言うのです。

少なくとも、その家庭の状態を私たちは連想することが出来ます。離婚を考えるような状態ですからその夫婦間にはいろいろな問題があるでしょう。いつも口論しているかもしれない、いろいろな争いがあるかもしれない。そのときは「離れて行かせなさい」と。もう一度15節を見てください。「離れて行かせなさい」というこの動詞は命令形が使われています。「もし信者でないほうの者が離れて行くのであれば、離れて行かせなさい。」と神は命じたのです。なぜなら、今見たように、そのような争いがある状態は正しくないからです。あなたができることは愛をもって祈りをもってベストを尽くします。それでもその人が離れて離婚しようとするなら、離婚することがみこころだと言うのです。

私たちができることは福音を伝えることであって人を救うことではありません。～をすれば何とかこの人が救われるのではないかと、みなそう願います。でも、みことばが教えることは、イエスを信じていない人の方があなたを捨てて離れて行こうとするなら、よりを戻さない、しかも、離れてしまって再婚するかもしれない。あなたができることは一生懸命キリストを証することであって、最終的にその人が離婚してだれかと再婚したとしても、あなたは祈り続けることができるのです。その人が救われるようにと…。そして、その人が離れて行ってだれかと再婚するなら、あなたも再婚できるのです。

こうして、パウロは少なくとも、コリント教会から届いた結婚に関する様々な質問に答えを与えるのです。残念ながら、今日はここで終わらなければなりません、17-24節は「結婚」からテーマが離れています。その後、25節からは再びパウロは結婚についての質問に答えていきます。

今日、私たちは何を学んだのか？結局、私たちにとって最も大切なことは何か？というと、神のみこころに従って行くということです。実は、17-24節でもパウロは再び「あなたは代価を払って買い取られた」ということを教えます。つまり、あなたはあなたの人生を生きるとそう思うでしょう？でも、聖書は神があなたに託した人生をあなたは生きると言います。何のために？あなたを造りあなたを救ってくれた神を喜ばせるためです。私たちは私たちの人生を生きるのではなく神がくださった人生を生きるのです。この方を喜ばせるために。そして、この方が喜んでいられるならあなたも喜ぶのです。神のみこころに従うことが神を喜ばせる唯一のすべである。そして、あなたが神を喜ばせる歩みをしているなら、神はあ

なたを大いに祝して、神の約束された幸せをもって生きるのです。すべてのカギは神であり、すべてのカギは神に忠実に従うことです。どうか、そのような歩みをもってあなたの神のすばらしさをこの1週間もそれぞれのところで現し続けてください。